

Title	カーレン・ブリクセン : 「詩人」にみるその文体
Author(s)	岡田, 令子
Citation	大阪外国語大学学報. 44 p.81-p.101
Issue Date	1979-02-19
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80743
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

カーレン・ブリクセン
——「詩人」にみるその文体——

岡 田 令 子

Karen Blixen : Her Symbolic Style

Reiko Okada

As for the works of Karen Blixen (1885—1962) containing an abundant amount of figurative expressions like metaphors and symbols, a special method should be applied to clarify the characteristics of her style. Some of them which appear in "THE POET" are, therefore, divided into three groups:

- 1) the marionnete doll, a favorite subject of the authoress and the main theme of this short story,
- 2) the idea of an earthly paradise, how it developed by the hero of this story, and
- 3) some passages reminding of Hans Christian Andersen's fairy tales and showing strong emotional high lights of surprise, jealousy and envy.

After the survey the following points are outstanding in her style:

- a) actions of immediate daily life to the level of literary classics handled with artistic effectiveness developing and creating a new symbolic style,
- b) a number of illustrative pictures metaphorically created from the bottom of the sea, and
- c) she shows influence of Hans Christian Andersen's fairy tales and his technique of description.

Karen Blixen's picturesque descriptions, vivid and most delightful, and expressive messages conveyed in this story are proved to have one common source, namely in her unusual talent of imagination, her powerful insight into human life as well as her profound love of nature.

Det sælsomme, rigtvoksende og orientalske ved Karen Blixens fortællinger er på en måde kun tilsyneladende. Det kommer af, at de ikke ganske handler om det, de ser ud til at handle om. I hendes digtning dækker den indre og den ydre verden hinanden, og vegetation fra begge egne vokser ind i hinanden og ved siden af hinanden. De begivenheder, hun fortæller om, har været igennem en analyse, før de igen er opstået til synligt liv. Ikke en intellektuel analyse, der opløser i begreber, men en analyse for den anskuende eftertanker, der fastholder det sanselige billede for at erkende de dybere kræfters spil. (Aage Henriksen, 96.)〔訳は5章の後〕

昨夏ブリクセンの“夜のコペンハーゲンでの会話”(1953)⁽¹⁾について考察した際、この作品の中にみられる多くの絵画的描写が非常に新鮮な印象を与え、これが彼女の作品を特徴づけるものの一つではないかと考えるようになった。しかしそれより数年前“詩人”についての小論(学報1974. 3)⁽²⁾でも彼女の作品のいたるところに挿入されたエピソードなどに駆使された絵画的説明がユニークなものであることを筆者は指摘した。それでいつかこのユニークなブリクセンの文体を検討してみなければと考えてきた。もちろん文学作品における“文体”は作品内容と表裏一体ともいえる重要な要素であり、冒頭にあげたオーエ・ヘンリクセンからの引用は、このブリクセンの作風——表現(外的世界)がどのように作品内容(内的世界)とかかわっているかを生い茂る植物の比喩で的確に説明している。

今回はブリクセンの文体考察の手始めとして、処女作「七つの奇怪な物語」(1935)から再度“詩人”を取り上げてみたい。この作品集には、後日作者ブリクセンがより洗練され落ち着いた作品を創作するにいたるまでの自己を赤裸々にぶっつけたと思えるふしがあり、また“奔放”⁽³⁾ともいえるほど縦横に躍動する想像力と創作意欲がうかがわれる。“詩人”は作者の生まれ育ったルングステッドルンにほど近いヒルシュホルム(ホーシュホルム)を舞台にしている。

2

Karen Blixen (1885-1962) と H. C. Andersen (1805-75)

ある日読書中に思いがけずブリクセンの名前を見つけ驚いたことがあった。*The Wild Swan* (H. C. Andersen 伝記)の著者がこの書を“カーレン・ブリクセンの思い出に”捧げていた。この事実から英国の伝記作家 Monica Stirling がブリクセンと浅からぬかわりを持つことがうかがえたが、それ以上に筆者の興味を誘ったことは、この童話作家 H. C. A. (ホ・セ・アナセン)とブリクセンの関係がいかなるものかということであった。

ブリクセンはH.C.A.の死後十年たって生れているが、彼女の家族の中には直接間接にH.C.A.とつき合ったものが少なかった関係上、年をとった家族を通じて彼女は彼を知っていた。ブリクセンの祖父は⁽¹⁾H.C.A.とイタリー旅行をし、またH.C.A.は、ユラン（ユトランド半島）にあるFrijnsborg⁽²⁾を訪問して、子供たちに自分の童話を聞かせた折、“彼女の父”がアメリカの森の中で生活していること、その時ある人が自分の童話を唯一の書物として持っていたことなどを聞いていた。⁽³⁾そのような理由もあってブリクセンは他の子供たちより一層、H.C.A.の童話作品に親しんでいたであろうし、また成人してからも、アフリカ時代（1914～31）にもデンマークへ帰国してから彼の作品を読んでいたであろうと思われる。⁽⁴⁾

実際“詩人”の中でブリクセンは“皇帝の新しい着物”（*Kejserens nye Klæder* 又は“裸の王様”）に一度ならず二度までも言及している。彼女の好んだシェイクスピア⁽⁵⁾からの影響とH.C.A.のいずれの影響が大きかったかは早急に云々できないにしても、デンマーク文学の伝統を受け継ぐ現代作家の作品——ブリクセンをも含めて——が巨匠H.C.A.の影響を受けたとしても決して不思議ではない。⁽⁶⁾そこでその影響がブリクセンの創作活動にいかに及んでいるのか、筆者は改めて強い興味と関心を覚える。

3

文学作品の分析には数多くの方法があるが、やはり作品内容に適應した方法があるはずである。今回の場合、筆者はまずその最適な方法を見出さねばという難題にぶつかった。

ブリクセンの最高傑作といわれる“悲しみの土地”（*Sorg-Agre*, 1944）に鋭いメスを加えているラーセン（E. S. Larsen）は、彼女の散文に文体研究者が陥る多くの盲点があることを指摘しながら、次のように検討方法の方向づけを示唆している：

……シンタクスによる分析では、この短篇の総合的な見解を得ることはできない。つまり、説明的で推論的などちらかといえは包括的で変化に富んでいる従文や、簡潔な単文を長くリズムカルに連ねた重文に打たれた、調和を与えりフラインされた句読点などを検討するだけではうまく分析できない。この短篇には比喩（*billeder*）とメタファーが多いが、それらも一連の文脈の中で前後関係をとらえなければ、機能的に効果をあげているという強い印象を読者に与えることはできないのだ。……………（*Prosaens Møster*, 130）

ラーセンはこのようにブリクセンの文体の考察には文脈の前後関係で“*billeder*”や“*metafor*”を見た上で理解することの重要性を指摘している。

上記の引用文で便宜上“比喩”と記したデンマーク語の“*billeder*”はH.C.A.の*Billedbog uden Billeder*“絵のない絵本”の*billeder*で絵画の意味だが、文体論上の用語としては比喩を含めもう少し広い意味をもっているようである。“しばしばメタファーの形で表わされるがアレ

グリーやシンボルをもこの範疇に入れる” (Litteraturleksikon, 31) . としているが、また billeder → metafor とし、さらに metafor = billedligt ord el. udtryk—絵画的な語または表現(Albeck, 274)としているものもある。いずれにしろこの billeder は “抽象的及び具体的な事象を深く掘り下げ、強調し明瞭にする” ことであり、鮮明な比較や対照的な絵で示されるものである。

ここで取り上げようとするブリクセンの散文は特に物語形式の短編 “myte” であるから、その性格上、抽象的な事象を極めて具体的な絵で表現していると考えられる。

さらにラーセンは：

〔ブリクセンの〕叙述的描写の中で、より広い眺望を開くことができるものは、テーマ自体の構造と、最少の支脈に到るまで、その構造が一貫している文体効果である。この作品〔悲しみの土地〕では特に絵を使っていることで構造への手掛りをうることができるのだが、とはいえ歴史的——分析的拡大鏡の下ではなく、総合的な拡大鏡——すなわち billeder を同類形態にグループ分けすることによって明確になるのである。(ibid 131,〔 〕は筆者が挿入)

と述べ billeder の重要性を指摘するとともに、従来行われていなかった総合的な方法が望ましいとしている。そこでこの小論もこれらのアドバイスを考慮しながら、“詩人” の中にみられる30余の billeder について考察してみた。

4

その前に “billeder” とは切り離すことのできない物語のテーマに触れておくことが billeder そのものの理解にも必要である。

ブリクセンは、われわれ人間はマリオネット人形であり、人生は一つのマリオネット劇である⁽¹⁾と考える。すなわち目にみえない “ある力” によって操作されている人間を象徴するものとしてマリオネットのテーマは直接あるいは間接に彼女の作品に現れてくる。

すでに少女時代(17歳位)にブリクセンは Sandhedens hævn “真実の報復——マリオネット喜劇” という作品を書き、家族の間で演じた。だがずっと後になって(1926年)初めてこの作品は文芸雑誌 “Tilskueren” (観客)の五月号(pp. 329-344)に掲載された。これは彼女がアフリカへ渡る前のことであるが、帰国後、作家として祖国で再出発して間もなく、同じ作品が1936年には一幕のマリオネット喜劇として王室劇場で深夜上演されている。単行本として発行されたのはさらに遅く1960年になってからである。その後もテレビでデンマーク、ドイツ、イタリーで放映された。⁽³⁾

「七つの奇怪な物語」の中の最初の作品“ピサを回る道”では、ブリクセンは第4章を “マリオネット”(Marionetterne)と題し、ここでこのテーマの核心とも考えられる台詞を魔女の口から次

のように語らせている。

マリオネット劇で何よりも大切なことは、作家の意図をはっきりさせておくことなのだ。
これがおまえさんたちに伝えたい秘密なのだ。——そしてこれこそ他のいたるところで人々が一生懸命探し求めている真の幸福なのだ。
(Vejene omkring Pisa, 40)

ブリクセンの深い人生哲学をかい間みる思いであるが、この小論で取り上げた短編集の最後の作品“詩人”にも一貫してマリオネットのテーマが流れ、それを基調にして物語の枠組がしっかりとでき上がっている。

簡単な筋書：デンマークの田舎町ヒルシュホルムに住む顧問官(マチーセン)は理想とする詩による楽園をその町に実現させるために、若い詩人(アナス)とその恋人(フランシーネ)を意のままに利用しようとするが成功せず、運命の復讐を受ける。

5

以下 Billeder を(I)マリオネット人形に関するもの、(II)理想の地上楽園の実現に関するもの、(III)H. C. Andersen のパロディー、春の喜び、驚きなどに関する三つのグループに分け、解説を加えて実例を列挙し、それにつづいて、引用文は原文のまま、第6章の後へまとめてつけ加えておく。

(I) “人形”

(i) 本文の“人形”を暗示する王の顔つき：

ヒルシュホルムに起こった王室の悲劇についての短い物語から“詩人”は始まっており、その中に“かわいい人形”という語が最初に用いられ、それを基調に人形のテーマが本文の中に一貫して流れている。

〔空虚な顔付きで優雅、そして髪粉をつけ、コールセットをしたかわいい人形のように王(クリスチャン七世)は馬車で出かけてゆく。〕

(ii) 古典的な理想を具えた“人形”：

マチーセンが初めてフランシーネを訪問した時に受けた印象は、温かみの感じられない抽象の理想を求めた昔の人形のようにであった。

〔彼女は小柄できゃしゃではあるが、美しくてまろやかな年若い女性で、人形のようにみえた。……彼女の最も特徴的なことは、その動作の軽やかさで、それは鳥の軽やかさであった。〕

(iii) プシケを感じさせる“人形”：

芸術作品としていつまでも生きた“Psyche”の中のプシケの像を考えたのかも知れないが、

〔人形の中にはブシケのもつ何かがあった。〕⁽¹⁾と思えた。

(iv) 音楽に聞き入る幸福な“人形”：

ある夜ふとしたことでマチーセンはリベルテ荘の一室でバレーをおどるフランシーネを見て大そう驚く。その時の“人形”の顔は

〔幸福に輝き、静かに立って音楽に聞き入っていた。〕

(v) 生き返った“人形”：

じっとして動かなかった人形フランシーネは、ある楽章が始まると生命を吹き込まれ生き返ったように描かれている。

〔彼女の楽章が始まると急に人形は生き返った。〕

マチーセンの驚きは非常なものでジーッとそれを夜の庭から見つめている。⁽²⁾

(vi) おびえる“人形”の家の家具たち：

フランシーネのバレーを見てからマチーセンは彼女との結婚を計画、求婚のためにリベルテ荘へ出向くが、彼女が現われるまでマチーセンが待っている。

〔ハープシコードとオルゴール、それに椅子たちがまるで大人がやって来るのに驚く人形の家の家具に似ていて、彼（マチーセン）を少し恐れるように背中を壁に向けて引き下った。彼はそれらの家具をなだめるように、“私はこわすために来たのではないのだよ……”。と彼らに言った。〕

(vii) “人形”で遊ぶ子供：

アナスはフランシーネの結婚式の日には死のうと決心している。式も近づいたころアナスはフランシーネを真近に描写する。

〔アナスは彼女を見ていると、いつか自分が彼女を一人の子供と比べたことがあるのを思い出した。自分のお気に入りの人形を、どんなことがあっても離すまいとしている子供。そこで、そのお気に入りの人形というのが彼自身なのであった。〕

(viii) “人形”になった“子供”：

アナスがフランシーネの下を去るのだと彼女に告げた時には、二人の関係は逆転し、マチーセンの見た冷たい人形は感情豊かな人形となる。

〔今度は彼女が人形で、それは一緒に着せ替えをして遊び、とても喜んでいる子供を離すまいとしている人形なのであった。〕

(ix) 道に迷った“人形”：

フランシーネはその恋人に見捨てられ、心のバランスを全く失ってしまう。

〔彼女は今や道に迷ってしまった、かわいそうな人形であり、彼（アナス）の手の中以外は、この世に行き場のない人形なのであった。〕

(x) 最高の芸術作品：

マチーセンは二人とお茶を飲み幸福感にひたっており、二人の動きをいつも楽しみながら見ている。

〔高尚な古典芸術のそんな風な多くの作品が夏の夜、リベルテ荘の野菜畑の中で動いていた。〕

(xi) こわれた“人形”：

恋人アナスに見捨てられたフランシーネは悲しみのあまり彼のそばを離れてリベルテ荘の方へ戻る。そこへアナスに射たれたマチーセンがはって行くが、彼女の形相はすっかり変わってしまった。

〔彼女の髪の毛さえ、腕のようにだらりと垂れ下っていた。彼女の生き生きした優しい人形の顔は涙でくずれ、傷ついていた。人形は壊されてしまって、今ではその明るい目もバラの口も、白い平面にある黒い穴にすぎなかった。〕

(xii) 絶望した“人形”：

ひどい仕打ちを受けたフランシーネは絶望に打ちひしがれ、立つことも坐ることもできないようであった。

〔ちょうど子供が持って遊んでいる人形の中の鉛か、あるいは死んだ水夫たちの足にくくりつけられていて彼らが海底に立って揺れているおもりのように、絶望が彼女をじっと立たせていた。〕

(xiii) 石になった子供を抱く“人形”：

しかし射たれたマチーセンを見たフランシーネは、自分の恋人は愛の証のために彼を射ったのだと思い誤りそれに呼応したかのように殺意をこめて石を引っこ抜く。

〔一生懸命にそれ（石）を両手でかかえ、年老いた魔法使によって石に変えられた彼女のただ一人の子供のように胸に抱きしめた。〕

(xiv) 聖なるマリオネット“人形”：

血にまみれ瀕死のマチーセンは自分たちは詩の楽園にいたいと思ひ、最後の力をふりしぼってフランシーネに呼びかける。

〔「聖なる人よ、フランシーネや、聖なるものよ、このままでいいのだよ、聖なるマリオネット人形よ」 と彼はいった。〕

(II) 地上樂園の理想を実現するために：

(i) 詩作のための代作者：

マチャーセンは自分が詩人でないことがわかると、若い詩人アナスの保護者となり彼に詩作させることに決める。

〔顧問官とはいえば、彼には持論があって、一つの原則に従っていた。……詩人としてこの若者の最高のものを伸ばすためには、彼を一種の籠か囲いの中に入れておかねばならない。〕

(ii) 計画の変更：

アナスの妻に未亡人のフランシーネが理想的だとも考えたが、例のバレエを見てからは自分の妻にしようと計画を変える。

〔チェスの駒を全部並べ変えなくては……〕

(iii) 不幸な恋によって：

アナスからフランシーネを取り上げ自分の妻にすれば、恋人同志は苦しみ、それによって良い作品がアナスから生まれるだろうと思う。

〔太陽が空高く昇るように、彼の考えがわいて来た。不幸な恋は詩人の感情を鼓舞する。〕

(iv) 余裕ある態度：

“独身男の祈り”——結婚しないように、もしすることがあっても不貞の妻の夫とならぬように、もしそうだとでも知らされないように、知ったとしても気にしないように——といったものである。ふとマチャーセンはこの言葉を思い出す。

〔そのような考えは、心の建物の中に徹底的に清掃された一部屋をもち、自分だけがその部屋の鍵をもっているのだと百パーセント確信できる男に許される。〕

(v) 結婚計画を披露する：

15年ぶりに訪ねて来たシ伯にマチャーセンは自分が再婚する計画であることを告げる。

〔この私の尊敬すべきビーバー帽の下で、色いろこまごま忙しく思いめぐらしていました。この二羽の黄色の蝶々のようにそれぞれが出て来て羽をパタパタさせております。〕

(vi) 家政婦の計画

マチャーセンの家で働くアバローネはアナスと結婚してレストランを開く計画らしい。彼女はネ

ズミしかいなければ、それで上等の料理をつくることも出来るような勤儉家である。

〔彼（アナス）は彼女（家政婦アパローネ）がスープの材料にしようと考えているネズミなのだろうか。〕

（vii） 調和と幸福と青空：

求婚は成功した。婚約の期間三人は彼女の庭で幸福な日々を過ごす。

〔あたかもどこか他の空間と時間と青空の中で泳ぎ飛翔するまで、エーテルそのものの中に、今まで知らなかった調和と幸福の中に置かれているように思えた。〕

（viii） 緑の庭、偉大な海底：

拳式をまつばかりのマチーセンは幸福の絶頂にあった。

〔リペルテ荘の緑の庭でお茶を飲んでいる時には、偉大ですばらしい海底の深みで何日も何週間もこの三人（フランシーネ・マチーセン・アナス）は生きていた。〕

（ix） 思い出の花輪：

いよいよ明日は結婚式である。マチーセンは昔の思い出にふける。

〔長い間忘れていた、あの出来事は彼の人生の小さな花だった。彼の人生の花輪——野の花、野に咲く忘れな草。彼の人生には忘れな草、すみれ、パンジーと少なからぬ花々があった。果して今夜はその花輪に一輪のバラを添えることになるのだろうか。〕

（x） 計画変更の原因：

美しい花のようなポーズに魅せられたマチーセン。このフランシーネの魅力が原因であった。

〔彼女（フランシーネ）は顧問官を真正面から見た。そして優美な押しつぶされた姿勢で縦に床の上に沈んだ——まるで茎を上にして投げられた一輪の花のように、まるで彼女の両脚が鋏で切られたように。〕

（xi） 運命の報復：

操ることが出来ると確信をもった二人であったが、マチーセンにとってこの二人は自分のあやつり人形などではなかった。二人に殺されてしまうのである。

〔今やまるで一片のきたならしいぼろのように彼は倒れ、大地にベッタリ横たわっていた。〕

（xi） はかり知れない深みへ：

マチーセンは何度も転倒しながら深みへ深みへと落ちてゆく。

〔それは、顧問官自身にとってみればただ一つの力づよい動きで頭から真逆さまに、ものす

ごい深みへとほうり出されたかのようにであった。]

(III) H. C. Andersen, 春の喜び、驚き：

(i) 堂々とした皇帝の行列：

シ伯は世間で言う成功者、人々の羨望的であったが、彼自身、精神的な複式帳簿をもって生きていた。

〔童話“皇帝の新しい着物”⁽⁴⁾の皇帝のように彼（シンメルマン伯）は莊重に人生を歩んできた、多分彼自身の目だけは例外だったが——永遠に続く立派な行列の中で、すべての点において堂々とした姿で。〕

(ii) 震える裸の皇帝：

アナスは森の中でマチーセンによってシ伯に紹介された時、すぐ伯を見やぶった。

〔彼（アナス）は片時たりとも皇帝の新しい着物にだまされることがなかった。それどころか行列の中心人物、シ伯が裸で震えているのを目ざとく見てとった。〕

(iii) 喪服をぬいで教会へ：

長い冬が去り五月になった。未亡人になってから一年過ぎたフランシーネは初めて灰色のオーバーにうすい水色の帽子といういでたちで復活祭の日教会へやって来た。

〔彼女（未亡人フランシーネ）は緑の木に止っている大きな森鳩のように幸福で、弱音器をつけたバイオリンで奏でるワルツ曲のように生きる喜びを体外に輝かせていた。〕

(iv) 身体中で感じる春：

人も自然も春の喜びに酔っている。

〔この澄み切った甘い香を放つ夜の大気の中で、彼女は自分の体が若い白樺のように強くて軽やかだと感じた。細い腰はその枝のようにしなやかで、美しく新鮮なリンネルの巣の中にある一對の温くて丸い玉子のように彼女の胸はさわやかにやすらいでいた。〕

(v) ふくらむ詩人の思い：

アナスも森へ出かけ、春を楽しんでいる。

〔この特別な春に彼（アナス）の心は太陽をめぐる惑星の軌道のような輪を描いて動いていた。〕

(vi) 鳥のような二人：

マチーセンも訪問して来た昔の教え子シ伯をともなって春の森へ散歩にでる。

〔黒っぽい服を着た二人（マチーセンとシ伯）は、二羽の落ちついた鳥——もっとうきうきし

た鳥仲間と連れだって五月の午後を楽しみに出かけたカラスかカササギに似ていた。]

(vii) 再会の喜び：

二人の再会は15年ぶりのことである。

〔顧問官の方では多分ディオゲネスがアレキサンダー大王に会いたいといつも思っていたであらうように、彼（シ伯）に会えたのがうれしかった。〕

(viii) 花嫁のベール：

森自身もだんだん優しさをましてくる。

〔優しく霞んだ灰色の雨が数日間、花嫁のベールのようにあたりを包んだ。〕

(ix) 森が飛ぶ：

新芽の出たすがすがしい森の中を散歩して人々はそこに春を見出す。

〔うす色の絹のように美しい新芽があちこちに小さな羽毛のようにふき出る若い枝は、風にはためく軽やかな旗のようで、“森が飛ぶ”かどうか試している小さな翼のようである。〕

(x) 抱擁する若い枝：

木々がその下を歩く人間たちに話しかけてくる春。

〔ほんのりした香わしさ、さわやかな感じが抱ようしながらわれわれを取りまく。われわれを愛撫するか祝福でもするように枝たちは少し上の方からおじぎをしている。〕

(xi) シ伯の驚き：

マチーセンが自分よりずっと年下の未亡人と再婚するというニュースにシ伯はひどく驚き、昔自分が彼の生徒だったころのマチーセンを思い出す。

〔自分の手持ちのエースやキングに自信満々な時に、彼（マチーセン）は小さな切札を出してコロリとやっつけてしまう。しかも彼には切札などすでにないだろうと思っている時に。〕

(xii) シ伯の驚き(2)：

シ伯はマチーセンがフランシーネに恋をさせ、詩人アナスをも意のままに動かす力をもっていると思い、すっかり驚いてしまうと同時に羨しいとも感じた。

〔何だって！と彼（シ伯）は思った。ヒルシュホルムのこの老魔法使（マチーセン）は自分の馴れ親しんだ妖精だけでなく、明らかに、森の精にも恋をさせ、おまけに恋をすると死ぬというアシュラ族の奴隷（アナスのこと）をも思いのままにすることができるとは！〕

(xiii) そしてこの羨望：

シ伯は自分がマチーセンに習った、若い頃を思い出す。

〔それは昔のままだった。この羨望のかるやかな刺戟はまるで黄色い蝶の羽が心臓にふれたかのような柔かさだった。〕

6

考察

(1) Billeder 表現の素材と効果

前章で見て来たように、ブリクセンが人物の性格や特徴を描き、彼のおかれた状況や、その相互関係を明快な絵で表現しようとするとき、その絵には多種多様の材料が使用され、その素材の選択も的確であることに気づくのである。登場人物の思想や心理状態など抽象的な内的世界を描写する場合、極めて具象的な絵による説明が加えられることで、物語の意味内容が深められ、読者の理解の範囲も広がりを持つてくる。

Billeder の中では人間が小動物や鳥にたとえられ、人体の一部が植物になっているかと思うと、反対に自然現象が人間の衣類の一部にもなっている。心の動きが昆虫や天体の動きとしてとらえられ、“驚き”もトランプの切札や、ポケットから取り出すネズミ(360)あるいは子供たちの宝物を吹きとばす爆薬など(360)で、抜打的に何枚かの絵を並べて表現している。

これらの素材には童話やマンガの世界を思わせる幻想的でロマンチックなものから、われわれが日々使用する身の回り品や日常生活の知恵まで一役買っているが、古典文学や哲学あるいは芸術、宗教に源流があると推察できる非常に洗練された素材も数多く登場して変化に富んでいる。

Billeder の中ではAがBに置き換えられるばかりでなく、A+Cの関係やA→Cへの動きがB+D、B→Dで取って替えられるなど立体的で動的な比較対照が頻繁に駆使されている。また事物を象徴的に用いる場合でも、文脈からみてこういった奇抜ともいえる特異な素材や逆に陳腐といえる素材が、それぞれ巧みな手法で物語にとりいれられ、変化に富んだ内容を構成しながらスケールの大きいメイン・テーマはゆるぎなく展開されて行くのである。

テーマの中で人形(フランシーネ)が地上楽園の設計者(マチーセン)によって聖人にまで変化してゆく過程を一連の絵で劇画的に表現するユニークな手法はまことに興味深い。まず歴史的エピソードの中に“顔”が現れ人体の一部で人形の全身の出現を暗示するが(I. i)その顔がデンマークの悲劇を生んだ王の顔であることから、読者はすぐに悲劇の要素を思い浮かべるであろう。⁽¹⁾次に人形のような女性が登場する。彼女の特徴は鳥のように軽やかな身のこなしである(I. ii)。当然鳥として象徴されるブシケの番で、この女性の描写が次第に具体的に紹介されてゆく。ブシケはまた蝶の形で象徴される。蝶は魂の遍歴の一つの過程を表すわけだが、この蝶の羽の動きによって主人公マチーセンの心の動きや(II. iii)、来客の羨望の感情など次々と表現されて行

く(360)⁽²⁾。プシケといえばギリシャ神話のほかに、H.C.A.の童話作品“Psyche”があり、その中に語られる芸術作品プシケと、そのモデルになった一人の美しい女性の冷たさなどをも思い出させる⁽³⁾。このようにプシケ(I. iii)にも複数のイメージをからませている⁽⁴⁾。さらに人形に音楽とバレエといった芸術性を加えてよみがえらせ、人形は踊り始めるのである(I. iv, v)。

この女性(フランシーネ)の恋人(詩人アナス)は、彼女を最初は“子供のようだ”と考え、次には「人形だ」と考えてゆくのだが、その子供あるいは人形の心理状態の転移を巧妙にとらえながら、古典美を象徴した人形とは別の視点で彼女を描写している(I. vii, viii, ix)。

人間自体が立派な芸術品とみなされることは別に珍しいことではないが、それが野菜畑を歩き回るといった素材の組合せには新鮮味があり、また単にそこに置かれた静止した像ではなく、動き回るといった動的な表現によって、その芸術作品(詩人とフランシーネ)を観察追求しつづける者(マチャーセン)の心の動きも同時に的確にとらえられている(I. x)。

人形の顔の一部分、口と目の描写には、簡潔な表現の中に実に種々の意味を持たせている点も注目される。“白色の平面に黒い穴”(I. xi)といった色彩と形は単純なようだが極めて複雑に内容と関わりをもっている。顧問官は“白くて丸いもの”が好きである(378)。黒はもちろん白と対照の色彩だから、彼の好まない色であり物である。また一般的にも黒は不幸の象徴でもある。丸いものと相対する平面も彼のきれいなものだろう。つまり色彩も形も彼が好まない時の人形は、事実失恋という最悪の心理状態におかれている時の顔つきをしている。“丸いもの”の好きな彼の性格はまた、完全なものを得ようとする彼の行動にもつながり、詩人とその恋人(フランシーネ)の両方を自分のものにしなくては気が済まない。物語に出没するアフォリズム——半分は全体より大きいという来客シ伯の言葉⁽⁵⁾——と彼の好みとは正反対であることも読者には物語の最後に理解できるのである。このように、読者の見のがすかもしれない、微妙な絵画的表現が、その底流でメイン・テーマや主役の性格に深く関わっていたり、事件とは一見無関係に思えた絵が後に出てくる事件を暗示しているが、このようなことはブリクセンの作品では珍しいことではない。さりげない文章の背景に彼女の直観、洞察力の鋭さを見せられる思いである。

想像力のすばらしさはブリクセンの優れた才能の一つである。力の抜けたように地上に立つ一女性の絶望感と、おもりにつながれ海底にふらふらと立つ水夫の姿に共通性を見出す想像力には極めて特異な何ものかが潜んでいる。ぞっとする程の恐怖感を抱かせる絵。海面を鏡にして、立っている実体とその映像のように、上からつり下げられている“人形”と下から引っぱられている死体を対照させた面白みというのか、偶然とはいえない難い不思議な直観力がうかがえる。地上のものを海底の事物にたとえる技法はブリクセンの作品に極めて目立つ文体である。それについては後に言及したい。

石を抱く女性の激しい殺意は、“魔力でただ一人の子供を石に変えられてしまった……”という表現で、この女性のうらみ、復しゅうといった強い感情が暗黙の中に感じとれる(I. xiii)。次に現実には銃で射たれ、今また石でとどめを刺されようとする男が、死の直前にすべてを理解し、

自分たちは詩の楽園にいると信じて、自分を殺そうとする女性に“聖なる人よ”と呼びかけるところでは、現実の把握の仕方に、両者の間で大きなギャップのあることがわかる。この最後の絵は現実生活と芸術の矛盾ともいべきものが端的に象徴されているようである(I. xiv)。

ブリクセンがこの男をボロ布にたとえていることは興味深く、彼女自身が実生活と芸術をどのように考えているかがうかがえる。彼女の立場は少くともこの顧問官とは相容れないのではなかろうか。顧問官は詩による楽園建設のためには、他人はすべてこの計画のための材料であるという発想をもっていることがわかり、非常に強い自信をもって客観的に自己をみつめている彼の態度がIIのグループの引用で理解できる。物語の最終の絵、もうろうとした幻想の中で底知れぬ深みに投げ出されたように感じた顧問官の物事の核心に迫るシーン(II. xii)は、“ブルーストリー”⁽⁶⁾の中で二艘の船が、ある時、急に地球の中心へ向かい、そこで出会うといったシーンを思わせる。

(2) 海底に関する Billeder

ブリクセンのBillederの一群は海底に関するものである。それは作品“詩人”に限ったことでなく、「アフリカの農園」(*Den afrikanske Farm* 1973)にも早朝、車でアフリカの高原に行く情景を暗い深海の底に行くかのように描写しているし⁽⁷⁾、また、“夜のコペンハーゲンでの会話”(*Samtale om Natten i København* 1953)でも町の街灯が海底で燐色の輝きを放つクラゲだとい⁽⁸⁾い、貴重な会話の瞬間を深海のかきの中にある真珠にも似ていると書いていることでもわかる。同じように“詩人”にあっても、この種の海底に関する絵が数ヶ所出てくる。引用はしなかったが、顧問官が“人形”のバレエを見た帰り、ヒルシュホルムの町が静かな澄み切った朝の空気の中で、まるで海底に横たわっているようだと思い、家々の赤い屋根をサンゴに、そして立ち昇る煙を海面に向かって伸びている海草になぞらえている(353)。シ伯が、自分の島をつくるサンゴ虫のように自分の精神世界を築いている間……といった表現もみえる(356-7)。またすでに引用した(II. vii, viii)調和のとれた幸福を青空を飛ぶ気持ちにたとえ、続いて“偉大ですばらしい海底”で生きたといった表現でも現している。ブリクセンはH.C.A.のように海の中を物語の舞台にしてい⁽⁹⁾ないが、その形容詞からも察することができるように、海底をすばらしい場と考えていることは興味深い。ブリクセンにとっては、大空も海も一つであり、どちらも同様に鮮明である。

海底のイメージの中でも引用(I. xii)に示した海底の水夫の例は、上記の諸例と異なるもので、その迫力についてはすでに述べた通りである。

ブリクセンの内的世界はアフリカ滞在の経験によって非常に拡大されたことは疑いないと思われるが、無意識の象徴とされる海(海底)を何度も地上(意識の象徴)の出来事に呼応させ比較することと何らかの関係があるのではないかと考える。

(3) 使用されている形容詞などからも、ブリクセンのもつデンマーク古典への造詣の深さが指摘されている。⁽¹¹⁾“詩人”の中でも直接間接にいくつかのH.C.A.の童話のシーンを思わせる絵が登場

し、多くの童話と共通の素材があちこちに用いられていることに気づくのである。前述のように彼女が幼い頃からH.C.A.の童話に親しんで来たたとすれば、彼から強い影響を受けたことも不自然ではない。⁽¹²⁾以下H.C.A.とブリクセンの関連を指摘する例とし、4点考えてみた。

引用したように(I. iii) まずプシケにH.C.A.の“Psyche”を思わせ、芸術家の造った像のモデルになった女性のもったであろう性格を“人形”に帯びさせている。⁽¹³⁾

次に顧問官が息をころさんばかりに“人形”フランシーネの踊りを見ている姿は、“りりしい錫の兵隊”(Den standhaftige Tinsoldat)⁽¹⁴⁾の中で、一本脚の兵隊が踊り子を眺めている姿(Samlede Eventyr I. 136)に似ている。しかし“私の妻にいい”(Det ver en Kone for mig! tænkte han)と錫の兵隊は思うが、自分の身分を考えてしまう。一方顧問官は、“踊り子”をみてからは自分の妻にすべきだとの計画をたて、それを実行するといった違いがある。

鉄で脚を切られたように(II. x)の箇所は、“赤い靴”(Den røde Sko)⁽¹⁵⁾で死刑執行人が赤い靴をはいて踊りつづけた主人公カーレンの脚を斧で切ってしまった箇所を思い出さずにはおかない。童話の世界では脚は無造作に切断されてしまうが、“詩人”では、「まるで……のようだ」という直喩の形をとり、物語の現在では起こらなかった出来事として描写されている。

描写のテクニックについて云えば、(I. vi)に引用したようにH.C.A.的な擬人法とも思えるもので、彼の童話の一部から取り出して短編の中へモザイクの一片のようにはめ込まれた感じさえ与える。ここでは“人形”自体についての直接的な描写をする代りに、周囲の部屋の有様を擬人化していきいきと描きながら、これが人形の家であるとの印象を与えるため、自ずと、その家の主人公が人形であるということを暗示する。この方法は、雪の女王を語らずに、いやが上にも雪の女王の存在を読者に意識させたH.C.A.が成功した描写のテクニックに似ている。⁽¹⁶⁾

その他、絵の中には童話的な魔女、魔法使、森の精などの素材が使用されているが、H.C.A.の童話のように彼らは独立した人格をもって舞台で活躍することはなく、物語の中に登場する人物が、上記の童話的な空想と幻想の産物たちの名で呼ばれ、それらの性格を登場人物が具えていることが暗示されているにとどまっている。

次は童話との相異であるが：

アレキサンダー大王と哲人との再会のエピソード(III. vii)的な出来事を小説の中の現在に関係づけて意義を持たせるといった作法は、決して童話の中ではみられない技巧であろう。このようにブリクセンの作品が童話的な素材——原始的なもの、幻想的なもの——を包括しながらも童話になり切らないわけであり、また単に童話に終わってはならないのである。童話の形式では十分に表現し切れない人間、特に男女間の細かい心の動きや、生命、死、愛、芸術、永遠、時間といった多くのテーマを一つの短編の中に盛り込まなければならないからである。

1. 文頭の引用文〔訳〕

〔カーレン・ブリクセンの物語にみられる神秘的なものや内容豊かなもの、更に東洋的なものは、彼女の作品の本質ではなく表面的なものといえる。彼女の物語を構成していると思える素材は、実は完全には彼女の創作活動として取扱われてはいないのだ。〕

彼女の作品の中では内面的な世界と外面的な世界が相互にオーバーラップし合っている。まるで植物が二つの分布領域にまたがったり、あるいは並列して生えているようだ。彼女が一つの出来事を物語る場合、その出来事が明確な姿をとって浮かび上がるまでに独特の分析過程をたどっているのだ。それは観念の中で解体される単に知的な作業ではなくて、もっと深いパワーから発する閃き、つまり絵画的な感覚に密着した、いきいきした映像を創作する彼女特有の分析なのである。〕

本文 5 の中の引用文 (原文)

(I)

(i)og Kongen køre ud i sin Karet, som en elegant, pudret og snørt lille Dukke med et tomt Ansigt. (337)

(ii) Hun var en lille smækker, men fint rundet ung Person, der saa ud som en Dukke, - ikke en af nutidens Dukker, der søger at efterligne menneskelige Smaabørns Udseende, men en af de Dukker fra gamle Dage, som i Lighed med Menneskeheden selv stræbte imod et abstrakt Skønhedsideal. Hendes store Øjne var saa klare som Glas, og hendes fine Øjenbryn og lange Øjenvipper saa store, som om de ver malede paa hendes Ansigt med en spids Pensel. Det ejendommeligste hos hende var hendes Bevægelseres Lethed. Den var som en Fugles. (344)

(iii) Der var noget af en Psyke i Dukken. (345)

(iv)og stod ganske stille og vogtede paa Musikken, medens hendes blide Dukkeansigt lyste af Lykke. (351)

(v) Idet hendes Takt faldt ind, kom hun pludselig tillive. (351)

(vi) Spinettet, Spilledaasen og Stolene havde trukket sig tilbage med Ryggen mod Væggen, som om de var lidt bange for ham, som Møblerne i et Dukkehus, der forskrækkedes ved en Voksens Tilsynekomst. Han prøvede paa at berolige dem. "Jeg er ikke kommet," sagde han til dem, "for at ødelægge, men for at fuldbringe." (365)

(vii) Idet Anders betragtede hende, huskede han, at han engang i sine Tanker havde sammenlignet hende med et Barn, som paa ingen Maade vilde skille sig af med sin Yndlingsdukke, og denne Yndlingsdukke var ham selv. (375)

(viii) Nu saa han hende anderledes, hun var Dukken som ikke vilde miste sit Barn, det Barn, der skulde lege med den, klæde den af og paa, og falde i Henrykkelse over den. (375)

(ix) Nu var hun en stakkels vildfarende Dukke, en herreløs Dukke overalt i Verden, undtagen i hans Hænder. (375)

(x) Saadanne mangfoldige Reproduktioner af høj klassisk Kunst bevægede sig denne Sommeraften i Køkkenhaven paa *Friheden*. (376)

(xi) Endogsaa hendes lange Haar hang, ligesom hendes Arme, livløst ned. Hendes friske og blide Dukkeansigt var opløst og ødelagt af Taarer. Dukken var slaæet itu, dens klare Øjne og dens Rosenmund var nu ikke andet end sorte Huller i den hvide Flade. (390)

(xii) Hendes Fortvivlelse holdt hende oprejst, ligesom Blyet i de smaa Dukker. Børn leger med, eller den Vægt, der er bundet til døde Sømænds Fødder, saa at de svajer staaende paa Havsens Bund. (390)

(xiii)og holdt den med al sin Styrke i begge Arme, presset ind mod Brystet, som var den hendes eneste Barn, der af den gamle Trolldmand var forvandlet til Sten. (391)

(xiv) "Hellige, Fransine, hellige, det er, hvad vi er," sagde han, "hellige Marionetdukker." (391)

(II)

(i) at Justitsraaden, hvad ham angik, havde en Teori og fulgte et Princip. at den Mand maatte holdes i et Slags Bur eller Indlukke, for at det bedste i ham som Digter kunde fremklækkes. (341)

(ii)han maatte stille om paa alle sine Brikker paa Skakbrættet. (352)

(iii) Hans Tanker steg, alt som Solen steg højere paa Himlen. Ulykkelig Kærlighed er en mægtig beaandende Følelse, (353)

(iv) Saadanne Tanker kan en Mand tillade sig, der i sin Aands Bygning har et grundigt renskuret Rum, og er fuldkommen sikker paa, at kun han selv har Nøglen til det. (353)

(v) Under denne min ærværdige Kastorhat har jeg, alt imedens jeg har lyttet til Deres aandfulde Betragtninger, syslet med smaa Tanker, der kom frem og flagrede omkring ligesom disse to gule Sommerfugle; (359)

(vi) Var han den Rotte, som hun havde tænkt at anvende til sin Ragout? (364)

(vii) Det forekom ogsaa ham, som om han hensattes til et andet Rum og i en anden Tid, op i selve Æteren, indtil han svømmede og fløj i det Blaa, og i en hidtil ukendt Harmoni og Lykke. (373)

(viii) I Dage og Ugevis levede denne Trio, selv naar de drak The i den grønne Have paa *Friheden*, i store himmelske Haves Dybder. (373)

(ix) Denne forlængst forglemte Hændelse var en lille Blomst i hans Liv, i hans Livs Krans, en Markblomst, en vild Forglemmigej. Der var ikke faa Blomster - Forglemmigejer, Violer, Stedmoderblomster- i hans Liv. Mon denne Nat vilde sætte en Rose i Kransen? (380)

(x)saa hun lige hen paa Justitsraaden og sank lodret ned paa Gulvet i en yndig, knust Stilling, som en Blomst, der bliver henkastet med Stilken opad, ganske som om begge hendes Ben var blevet klippet af med en Saks. (351)

(xi)faldt nu sammen og laa paa Jorden som en Byldt gamle Klæder, (392)

(xii) For Justitsraaden selv var det, som om han i en eneste mægtig Bevægelse var blevet slynget paa Hovedet ned i en umaadelig Afgrund. (392)

(III)

(i) Som Kejseren i Fortællingen om Kejserens nye Klæder skred han værdigt gennem Livet, som i en evigt varende stor Procession, en imponerende Figur paa alle Maader, undtagen maaske i sine egne Øjne. (356)

(ii) Thi han lod sig ikke noget Øjeblik narre af Kejserens nye Klæder, men saa straks Grev Schimmelmann som Midtpunkt i Processionen, gysende i den bare Skjorte. (361)

(iii) Hun var saa lykkelig som en Ringdue i et grønt Træ, og udstraalede en Livsglæde, der var som en Vals, spillet paa Violin med Sordin. (346)

(iv) I den klare sødt duftende Aftenluft følte hun sit eget Legeme saa stærkt og let som et ungt Birketræ, sin smalle bøjelig som en Kvist, og sine unge Bryster hvilende let som et Par varme, runde Æg i deres Rede af fint, friskt Lærred. (376)

(v) Hans Hjerter bevægede sig i dette særlige Foraar i Kredse saa vældige som Planternes Baner omkring Solen. (361)

(vi) I deres mørke Klæder lignede de to adstadige Fugle, Krager eller Skader, der var ude at nyde Majeftermiddagen sammen med deres mere livlige Fuglefæller. (357)

(vii) Justitsraaden, for sit Vedkommende, vilde altid have været glad ved at træffe ham, saaledes som Diogenes sandsynligvis altid gerne have mødt Alexander. (357)

(viii) Den blide, tætte, graa Regn faldt i nogle Dage omkring hele Verden som Sløret omkring en Brud, og der kom en Dag, hvor alle Skove stod grønne. (354)

(ix) Det unge lyse, silkefine Løv springer ud hist og her som smaa Dun, hele nyudsprungne Grene stikkes ud som lette Flag, der vajer, smaa Vinger, som Skoven prøver - "Skoven flyver." (354)

(x) Grenene bøjer sig lidt ned og oppe fra som for at kærtegne eller velsigne os, og vandrer man saa videre, gaar man fremad hvor Velsignelsen uophørligt daler ned. (354)

(xi) Naar man sad trygt i Tillid til sine Esser og Konger, spillede han en ganske lille Trumf ud, der slog dem ned med et Slag, - og det i et Øjeblik, da man troede, at der ikke var flere Trumfer inde. (360)

(xii) "Hvad!" tænkte han, "raadede den gamle Troldmand i Hirshholm ikke alene over sin velkendte Husdjævel og tydeligvis ogsaa over en Dryade at elske, havde han tillige i sin Besiddelse en ung Slave, ud af den Stamme Asra, der dør naar de elsker?" (362)

(xiii) Saa blidt som var det de gule Sommerfuglevinger, der havde berørt hans Hjerte. (360)

<注>

1

- (1) cf. 拙論 8.
- (2) cf. 拙論 2.
- (3) cf. Aage Henriksen, 63.

2

- (1) Adolph Wilhelm Dinesen (1807-76).
- (2) K. Blixen の大伯母にあたる家族の城
- (3) cf. H.C.A.: *Deres broderligt hengivne*, 243, cf. Erling Nielsen 53, 59, 66. ("彼女の父" はブリクセンの父にあたる Wilhelm Dinesen)
- (4) cf. *The Wild Swan*, 19.
- (5) cf. Aa. Henriksen, 97. K.B. はシェイクスピアやゲーテから特に "spejlingsteknik" を習得した。
cf. L. Henriksen, 31: "Shakespeare, som jeg har elsket fra jeg var ganske ung pige."
- (6) cf. Aa. Hansen, 60: "1870年以降のデンマーク大作家は何らかの影響を受けている。"

4

- (1) cf. Aa. Henriksen, 10.
- (2) Gyldendal 社より1960年8月23日刊 5,000部発行された。
- (3) cf. Hannah, 116. 北欧の諸劇場で上演もされた。
- (4) W. Morris: *Earthly Paradise* (1868-70) を K.B. が意識していたかどうかは不明である。

5

- (1) "Psychen" H.C.A.: *Samlede Eventyr* III 105.
- (2) "Den standhaftige Tinsoldat," *Eventyr* I, 136.
- (3) プシケはまたある時には蝶として象徴される。
- (4) "Kejserens nye Klæder," *Eventyr* I, 93. "裸の王様" などの訳あり。

- (1) Christian 7 世 (1749-66-1808)、cf. 拙論 2、27.
- (2) "saa blidt som var det de gule Sommerfuglevinger, der havde berørt hans Hjerter."
- (3) cf. *Eventyr* III, 109.
- (4) ギリシャ 神話、H.C.A., W. Morris の "Psyche" etc.
- (5) テキスト、378.
- (6) 拙論 5、156. cf. *Vinter-Eventyr*, 46.
- (7) *Den afr. Farm*, 176
- (8) *Samtale*. 167.
- (9) *Samtale*. 176.
- (10) Den lille Havfrue (人魚姫) etc.
- (11) cf. Larsen, 130-131.
- (12) → 2、(6)
- (13) さわれる事がきらいだという性格 "Hun var i allerhøjeste Grad tilbageholdende over for Berøring," "詩人" テキスト 345. cf. *Eventyr* III, 109 (Psyken).
- (14) *Eventyr* I, 136.
- (15) *Eventyr* I, 333.
- (16) cf. 拙論 7、52.

TEXT : Karen Blixen : *Syv fantastiske Fortællinger*, Gyldendal, Copenhagen, 1969.

REFERENCE BOOKS :

1. Andersen, H.C. : *Samlede Eventyr og Historier*, I-III Gyld. Copenhagen, 1969.
2. " : *Deres broderligt hengivne* (Et udvalg af breve fra H.C.A.) Gyld. Copenhagen, 1975.
3. Andersen, Vilhelm : *Dansk litteratur, Forskning og Undervisning*, Gyld. Uglebøger, Copenhagen, 1970.
4. Karen Blixen *Vinter-Eventyr*. Gyld. Copenhagen, 1966.
5. Christensen, Folmer : *Litteraturlleksikon*, Gjellerup, Copenhagen, 1969.
6. Hannah, Donald : *Isak Dinesen-Karen, Blixen. The Mask and the Reality*, Putnam & Co., London, 1971.
7. Hansen, Aage : *Sprog i sproget*, Gyld. Copenhagen, 1972.
8. Henriksen, Aage : *Det guddommelige barn og andre essays om Karen Blixen*, Gyldendals Uglebøger, Copenhagen, 1970.
9. Henriksen, Liselotte : *Karen Blixen-Isak Dinesen, En bibliografi*, Gyld. Copenhagen, 1977.
10. JCLA (日本比較文学会) : *ジャンル別比較文学論*, カルチャー出版社, Tokyo, 1977.
11. Kawai, H. (河合準雄監訳) : *人間と象徴*, 上下, 河出書房, Tokyo, 1975.
12. Kobayashi, H. (小林 英夫) : *文体論の建設*, みすず書房, Tokyo, 1975.
13. Larsen, Finn Stein : *Prosaens Mønstre*, Berlingske, Copenhagen, 1971.
14. Migel, Parmentia : *Titania*, Random House, New York, 1967.
15. Ohe, K. (大江健三郎 外) : *大学を考える* The Mainichi Press, Tokyo, 1978.
16. Nielsen, Erling : *H. C. Andersen*, Gyld. Uglebøger, Copenhagen, 1963.
17. Stirling, Monica : *The Wild Swan, The Life and Times of Hans Christian Andersen*, Harcourt Brace & World, Inc., New York, 1965.

その他

1. Okada, Reiko (岡田令子):カーレン・ブリクセン——人とその作品についての小論——大阪外大学報29号
1973.
2. " カーレン・ブリクセン: "詩人"における小説技法とその内容 IDUN I 大阪
外大 デンマーク語学科 1973.
3. " カーレン・ブリクセン: "Sorg-Agre"——人間の条件——大阪外大学報31号
1974.
4. Okada, Reiko (岡田令子):カーレン・ブリクセン: *Den afr. Farm*にみる生活と思想 IDUN II 1974.
5. " カーレン・ブリクセン: "カーネーションをつけた若い男"にみる文学観 大阪外
大学報 1975.
6. " "人魚姫"の中にみられるH.C.Andersenの内的世界 言語研究双書I
蛭沼寿雄教授還歴記念論文集 大阪言語研究会。日本ケルトケルト研究会 1976.
7. " "雪の女王"——その中にみる男女の元型—— IDUN III 1976.
8. " カーレン・ブリクセン——詩人の使命—— "Heretica"との関係において 大阪
外大学報 41号 1978.